と同じく人々の感情も凍っていたように思う。今は故人の成仏を願うのみである。

仲間の自殺

医務室を出て近くのラーゲルに配属された。民主化運動と称する洗脳の嵐が吹き荒れていた。重労働と強制教育にほとほと疲れてしまった。それに耐え切れなくなったのか、一人の若い仲間が逃亡するという事件が起きた。手分けして捜したが見つからない。翌朝ラーゲル近くの作業場で首つり自殺の姿で発見された。祖国の方を向いていたそうである。

広いシベリアでは逃げおわせないと考えたのか、ラーゲル近くまで戻ったものの懲罰を恐れてはいれなかったのか、追い詰められた心情のままみずから死の道を選んだのであろう。虜囚の悲哀が身にしみ、やり切れない気持ちだった。このとき、簡単ながらも全員で葬礼を行い、回向したのがせめてもの救われた思いだった。

おわりに

抑留は多くの犠牲者を出したし、生き抜いた者も苦難を味わされ、また戦後の貴重なときを無為にした。さらに復員後の体の変調で苦しんだ人もあるはず。私は虫垂炎の余後治療や脚気などで、体調が正常に服するのに二年近くを要した。

入ソまで

岩手県　吉田　久馬太郎

終戦から四十五年の歳月が流れ去ろうとしている。今、我々シベリア抑留経験者が、永久平和の願いを込める一端として、議連の諸先生方のたゆまざるご努力により、政府の計らいによって、認可法人平和祈念事業特別基金の設立を見るに至ったことは、まことに意義あることと同時に、今回基金が事業の手始めとして、企画せるシベリア抑留体験労苦を広く募り、後世に伝え残すため、作業に取り組むことになったことは、永久凍土に眠る多くの戦友への鎮魂につながり、ひいては忘れられようとしている戦争の残酷さ、愚かさへの警鐘になることを願いながら、つたない筆をとる。

キスカ島へ出発

昭和十七年十月応召からまる一か月の在隊生活（青森市北部第八十一部陸軍通信連隊）を後にして、夜の青函連絡船に乗り込んだ。（私を含め無線通信兵三人）原隊ですでに聞いていたが、札幌月寒で編成が終わり次第、北千島を経由して、北方最前線キスカ島へ向かうことになっていた。

軍需物資と兵員を満載した貨物船は小樽の岸壁を離れたが、ジグザグ航行のため、思いのほか時間を要して、幌莚島に着いた。北海守備隊司令官峯木十一郎少将の到着を待って、明日将兵五十人が駆逐艦でキスカへ向けての出航である。

キスカ島七か月間勤務のうち、百二十数回の空爆と数十回に及ぶ夜の艦砲射撃を経験したその間に、アッツ島の玉砕「この連絡をもって、最後の通信とする」。司令部に最終打電がはいった。キスカを飛び越え、構法遮断の作戦に出たのである。今後はいよいよおれたちの番かな。兵隊同士で覚悟を確かめ合う。

ある日、司令部前に集合がかかった。人事係進藤曹長から、家族あてに遺書を書くこと。書きたいことは何でもよし。爪、毛髪、貯金通帳等をこれに。各自に小箱が一個渡された。

当時の戦況として、艦船の昼間航行はほとんどなかった。決まった時刻にアメリカの哨戒機がやってくるからである。夜をついで、我が軍の潜水艦が入港してくる。病人と飛行場建設の軍属を北千島へ帰すための潜行輸送である。決戦に備えての措置であった。

この直後、勅命による「ケ号」作戦（撤退）が展開された。藤井参謀少佐が、峯木司令官の命により、キスカ撤退作戦を敢行すべく、幌莚島に赴いていた艦隊に便乗して、海軍と行動をともにし、キスカ島防衛の任に当たっている陸軍の日本軍を救助するためである。春の北海は、濃霧のため先がほとんど見えぬ日がしばらく続く。この濃霧を利用して艦隊が入港する作戦である。

ある日艦隊が鳴神湾に入港する今夕十六時までに、乗艦基地に集合すべしの指令が飛んだ。各陣地から、野を越え、山を越え、基地への集合を急いだ。行動は三日三晩に及んだが、ついに艦隊はあらわれなかった。待望の

濃霧が現れないので、敵の哨戒機を警戒して、沖合を躍起しているうちに燃料が尽きて、逆に千島へ引き返したのである。

我々司令部の通信班は、歩兵大隊長穂積少佐の指揮下にはいって行動した。艦隊が北千島へ引き返したことを知るや、また三時間の山越えである。さあ、歩くか。穂積少佐のかけ声で、もと来た道を歩き出した。山頂での十分間の休憩時に、少佐がぽつりと語った。昭和十二年の「蘆溝橋事件」の発端は、おれが中尉のとき、こちらからしかけたのさ。かっぷくのよい巨体の持ち主で、時折兵隊を笑わせ、みずからも一緒に笑う部隊長であった。燃料補給のために、北千島へ引き返した艦隊からは数日音信がなく、霧もかかる様子がなかった。濃霧がかかるのは四月いっぱいくらいであり、今はもう五月も半ば過ぎ。艦隊を待つ望みも、一日ごとに薄れてゆく感じがした。

ある日、突如、まさに突如である。鳴神基地集結の指令が各隊に通報された。最も遠い陣地からは、集結基地まで六時間もかかる。穂積少佐を先頭に山越えが始まった。山頂からはるか鳴神湾を見おろすと、湾口から沖合にかけて、一面に霧がかかっているではないか。待つことしばらく、濃霧の中から艦首があらわれ、艦橋で手を振る。ニコニコ顔の藤井参謀の姿が見える。水上工兵隊の操作する舟艇は、桟橋と舟の間を激しく往復する。いずれの舟も、指ほどの太さの糸で編まれた網を、艦前から艦尾までつり下げ、舟艇はどこへでも着けられるように配慮されていた。兵隊は素早くよじ登る。キスカ島に最後まで残った陸海の決戦兵四千人は、一兵も損することなく、わずか二十八分で乗艦を完了した。港外に出るや、船は速度を上げた。海軍さんが各室を回り、これより八時間フルスピードです、明朝やってくる敵哨戒機の圏内から逃れるためです、こうして北千島へ生還した。

北千島占守島における日ソ戦

奇蹟的に生還して、しばらく休養の時間が与えられた。そして、北千島要塞司令部通信所、阿頼度島、通信所を経て、占守島中隊復帰、大観台気象観測班長—終戦—長かった戦争もついに終わった。兵舎での会話は、いつ船がくるのか、船はないそうだ、帰国の話で持ち切り。

三日後にソ連軍が上陸してくるとも知らずに、占守島における戦闘はあまり知られていない。

八月十八日午前二時三十分、占守島黒端岬に突如ソ連軍が上陸を開始した。方面軍司令官は、「断固速滅せよ」。命令を発した。日ソ合わせて三万五千の大軍が入り乱れての大激戦となった。完膚なきまでにソ連軍をたたきつけた。両軍から軍使が出た。日本軍からは柳岡参謀（抑留中死亡）、交渉は決裂して、再び戦闘が再開された。大本営からは、戦闘を中止して武装解除に応じよ。ひっきりなしの電報である。ソ連軍の捕虜となってたまるか。戦闘を続行すべしとりきむ将兵もいたが、日本は負けたんだ。島の攻防戦は大詔がおりて、七日目をもって終わりを告げた。

抑留地マガダンへ

武装解除が終われば、一切ソ連の命令どおり、一か月余りの戦場整理が済むと、「東京ダモイ」とだまされながら、四千人の将兵がソ連製貨物船に詰め込まれた。十月二、三日と記憶するが、着いたところが沿海州。北緯六十度マガダンという流刑の町であった。満四年間の抑留生活中にわかったことだが、マガダン以外の地に住むソ連人は、マガダンという言葉をできうるだけ口にしないことにしている。相手はマガダンと聞いただけで、顔が青ざめ、ふるえ上がるからである。銃剣を突きつけられながら、流刑の町マガダンの岸壁に上陸した四千人の労苦は、ここから始まった。北極圏に通じる通路工事、伐採作業（二十四年九月まで作業隊長）に従事。みずからの手で揚陸作業を終えた船に乗って、ナホトカへ向かった。

シベリアに生きる

北海道　川　友　勝

第七収容所

昭和二十年十一月二日タイセットより五十二キロ囚人の村キビトークに下車。我々五千人は駅より約八キロ白がいがいの雪路を警戒兵にどやされながらトボトボ歩いた。だまされた無念さと、いつ帰国できるかわからない